

三井物産、日本ユニシスト、国際ビジネス、人事・人材育成の第一線で活躍され、現在、早稲田大学で、その豊富な経験を大学生に伝授するために教鞭をとられている佐伯基憲氏にご寄稿いただきました。グローバル化する今だからこそ、日本語力を高めていくことが重要であると力説されています。



佐伯基憲氏 プロフィール

1947年1月、富山県立山町に生まれ、早稲田大学を卒業し三井物産に入社。2001年同社取締役並びに日本ユニシスト取締役に就任し、日本ユニシスト代表取締役常務執行役員として人事・人材育成・法務部門を担当する等ビジネスの最前線で幅広く活躍。2001年より、早稲田大学理工学部（現・創造理工学部）経営システム工学科で、学部4年生必修の特別演習を担当。企業倫理と技術者倫理、社会人としての知見に基づく経営戦略論「私論・人財経営論（人を活かす経営）」を講じる。

人間は言葉（言語）でものを考え、言葉で意思疎通を図る動物です。自らの考えや感情を表現し、意思を伝え、お互いの理解を深めるために言葉は欠かせません。また言葉は民族固有の文化の重要な構成要素であり、『万葉集』や『源氏物語』、『徒然草』や『方丈記』など、はるか昔の人々の英知に触れることができるのも言葉のお蔭です。

日本語を母語とする我々日本人は日本語で発想し、日本語で考え、日本語で表現します。日本語は我々の知的活動やコミュニケーションの土台であり、その基礎力や運用能力が思考力や判断力に大きく影響します。グローバル化する今の世界で、自らの考えや想いを正しく相手に伝えるためには、まずは「日本語で考える力」を高めることが大事だと思います。

企業活動の基本も言葉です。語彙力や表現力が稚拙で、自分の思いが相手に伝わらなければ商売は成り立ちません。私が入社したころ（1970年）は、新入社員の業務日誌も出張報告や引継書もすべて手書きで、それも漢字とカタカナ表記でした。手書きは能率が悪いかもしれませんが、自らの手で書くことにより考えが整理でき、それが知識として蓄積され、やがて知恵に成っていったように思います。パソコン時代の今日でも、効率重視のコピペより手書きの方がはるかに人間の知的活動に有用だと思っています。

グローバルな世界においては、日本語で考えた自らの主張を、コミュニケーションの手段となる言語、例えば英語に置き換えて、論理的に表現する力も必要になります。論理的にと言うと難しく聞こえますが、要は、自分の考えを言葉で伝え、相手に正しく理解してもらうことです。

私は1991年（43歳のころ）に、1840年に創立されたイギリスの老舗企業に1年程出向し、傘下にある会社43社を訪問、330人を超える幹部の皆さんと交流した経験があります。多くの人と交わり、英国流の経営を学び、たく

さんの知人を作り、東西冷戦終結後の世界を考えるヒントを得ることなどが主な目的でしたが、行く先々で、日本流と英国流の経営の違いや経営者の理念や信条、日英の歴史や文化・芸術・スポーツ談義など話題は多岐にわたりました。世界を舞台とする場合は手段・道具としての言葉以上に、「会話の中身」となる幅広い知識や教養、歴史観や世界観・事業観、そして人生観などを磨いておくことが重要だと痛感しました。

言葉が話すことが上手でも、話す中身が薄っぺらでは共感も感動も生まれません。日本人の基盤である日本語と日本文化に対する深い理解が、グローバル社会で活躍するための必須の要件だと思います。

最近、若者の間で「あげぽよ」（テンションがあがっている状態を指す）とか「オケボ」（カラオケボックスのこと）など、いささか理解し難い略語や俗語が使われていますが、これを言葉の乱れと見るか進化と見るか、意見は分かれています。歴史的にみると、言葉は時代と共に変化してきました。今も「パソコン」や「スマホ」など、技術の進展に伴い新しい言葉もたくさん生まれています。

したがって、今の傾向を一概に言葉の乱れと断言はできませんが、本来言葉には意味があり、魂がこもっており、民族の文化継承には不可欠のものとする私には、あまり好ましい傾向とは思えません。

日本語は多様な表現を持った言語であり、それぞれの場面にふさわしい、適切な言葉を選び表現する必要があります。これはビジネスの世界でも同様で、蓄積された語彙力と不断の学びによって磨かれた多様な表現力によって、アウトプットの質と量が違い、結果として、客先の理解度や共感度に影響を及ぼし、ビジネスの成否を決めます。

いつの時代も、「読み・書き・そろばん」は大事です。明治維新後の近代化を短期間で実現できたのも、江戸時代の寺子屋や藩校で学んだ基礎力があったからこそだと思います。

文明開化の掛け声の下、国の仕組みや法律・法体系、殖産興業に必要な科学技術や文化芸術を学ぶために欧米諸国から多くの教授陣を招き、その人の国の言葉で、すなわち英語やドイツ語で新しい知識を学びました。しかし、それでは国造りに必要な人材を速くたくさん輩出するには限界があり、日本語で教育する必要性が痛感されるようになりました。

そして知恵を絞り、外国語を日本語に置き換え、多くの大学を創り、それによって近代化を成し遂げてきました。こうした我々の来し方を振り返り、日本語の基礎力と運用能力を高めて行くことの重要性を、いま再認識する必要があると思います。

知識のない人から知恵は生まれないと、私は考えています。知識を吸収する方法は三つです。即ち、本を読むか、先人先哲の話を聴くか、自分で体験するかです。

また、ビジネスにとっては「信用・信頼」が大事です。「信」と言う字は「人+言」でできています。つまり、信用の基は「人が言ったことを守ること。即ち、言行一致」です。自分の「言葉」に責任を持つことが信用・信頼の基です。

今のインターネット時代は、すべてが個人に帰着する時代とも言えます。ネットの中に埋没すると、その個人は時として「孤人＝孤独な人」になってしまう危険性があります。これを防ぐには、生身の付き合いを通して人と人の絆を深めていくことが大事であり、この面においても、一人ひとりのコミュニケーション能力や思考力、判断力、表現力、即ち、日本語の基礎力や運用能力を高めて行くことが重要であると思います。是非、正しい日本語を身に付けましょう。